

スナップエンドウの促成栽培における 長期安定生産技術

農業研究センター 天草農業研究所
担当者：橋本直樹

研究のねらい

近年、重油の高騰による生産経費の上昇から、低コストの新たな作物が望まれている。その中で、スナップエンドウの促成栽培は従来の品目と比較して燃料の消費量が少なく、単価も安定していることから、新しい品目として注目されている。しかし、ハウスでの栽培において栽培技術が確立されていないため、心止まり等の生育障害の発生が見られ、また収量も低い状況にある。

そこで、長期間にわたり安定した収量が確保できるスナップエンドウの栽培技術を確立する。

研究の成果

1. 10節以下まで摘花することで、無摘花と比較して100kg/a程度収量が増加する(表1)。
2. 被覆燐硝安加里(ロングステージB180日タイプ)を用いた、全量基肥が追肥区に比べ収量が多く、追肥作業も省力できる(表2)。
3. 主枝と併せて、側枝を11月～12月上旬に1本仕立てることで、500kg/a以上の収量が得られる(図2)。
4. 生産経費は初年度で、資材代、肥料代、農薬代、種子代として約52,000円/a(出荷経費、人件費は除く)となる(表3)。

以上のことから、スナップエンドウの促成栽培において、10節以下を摘花し、また肥料を全量基肥として与え、12月上旬までに側枝を仕立てることで、500kg/a以上の収量が得られる。

普及上の留意点

1. 本試験での供試品種は「ニムラサラダスナップ」で、播種前に防風ネットや寒冷紗を被覆し地温抑制に努める。ビニールは、11月以降、降霜前に被覆する。草勢の低下を防ぐため、収穫は11月及び3月以降の高温期は、莢の厚さ7mm、12～2月は1cmを目安として収穫する。
2. 仕立てる側枝1本以外は全て除去する。側枝についても5節程度摘花を行う。
3. 本試験は、夜温は5℃で管理した。その時の暖房時間は期間を通して4時間程度だった。
4. 連作障害回避のため、収穫終了後、必ず太陽熱消毒を実施する。土壌病害発生ほ場では、薬剤防除も併せて実施する。

[具体的データ]

表 1 摘花の範囲が収量に及ぼす影響 (H18年度)

試験区	収量(kg/a)
無摘花	265
5節以下摘花	318
10節以下摘花	353
15節以下摘花	312

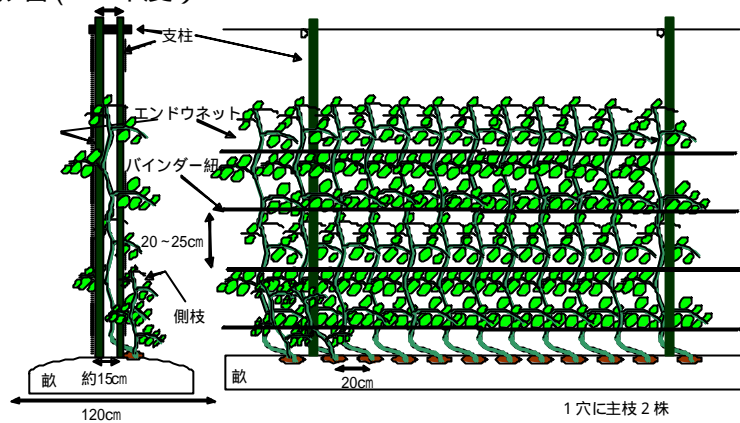


図 1 促成栽培における栽培方法

表 2 施肥方法による収量に及ぼす影響 (H18年度)

試験区	収量(kg/a)
全量基肥	366
基肥+追肥	299
基肥+追肥	346
基肥+追肥	355

全量基肥区は、被覆燐硝安加里（ロングステージ B 180日タイプ）を基肥でN:24kg施用した。追肥区は、基肥にN:10kg与え、は半月毎にN:1kg、は1ヶ月毎にN:2kg、は1ヶ月毎にN:3kgを収穫開始時(11月25日)より液肥として施用した。全量基肥及び、は液肥を施用しないときは、と同量のかん水を実施した。

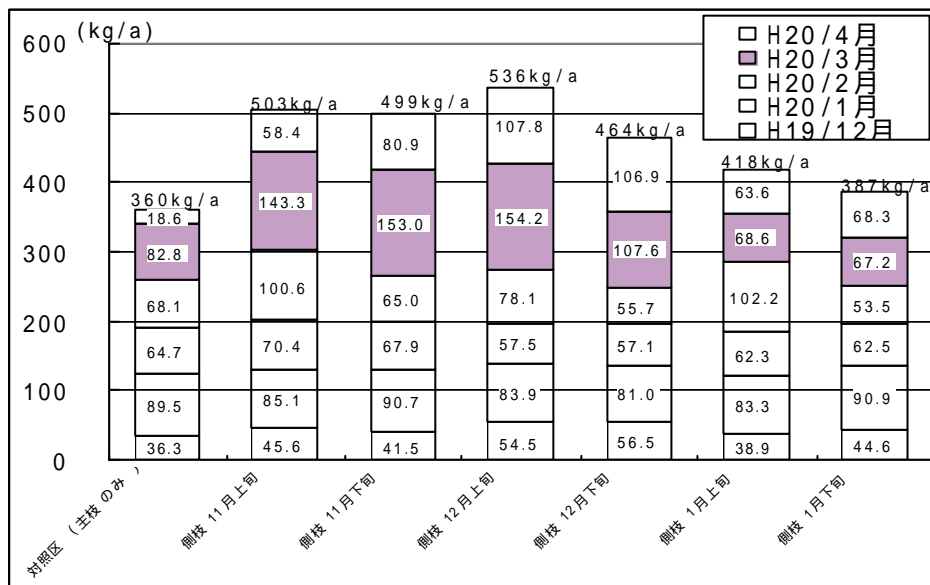


図 2 側枝の仕立て時期による収量の違い (H19年度)

試験は全量基肥、10節以下摘花で実施。

表 3 生産経費

	金額 (円/a)	使用年数	年経費 (円/a)
支柱	21,000	3	7,000
ビニール	13,000	1	13,000
エンドウネット	1,700	1	1,700
白黒マルチ	2,600	1	2,600
肥料代(ロングステージ等)	5,000	1	5,000
農薬代	7,000	1	7,000
種子代	2,000	1	2,000
合計	52,300		38,300